

第十一章 武蔵屋本と早矢仕民治

一 「やまと文範」と「近松著作全書」

この時期の丸善の出版物の中で、すこぶる異彩を放っているのは、古典むしろ言えば近世文学の翻刻である。古典の翻刻は、西南戦役の終わった頃から、にわかには盛んになって来たが、明治十四年に、丸善では他店との共同出版であるが「やまと文範」第一集を刊行している。これには仮名手本忠臣蔵、妹背山婦女庭訓、近頃河原達引、絵本太功記、花上野誉之碑、国性爺合戦の六種の院本が収められている。翌十五年には「やまと文範」第二集（奥州安達原、菅原伝授手習鑑、一谷嫩軍記、本朝廿四孝、生写朝顔話、伊賀越道中双六の六種を収める）及び第三集（平仮名盛衰記、北条時頼記、三日太平記、蝶花形名歌島台、彦山権現誓助劍、太平記忠臣講釈の六種を収める）が刊行された。四六判、黒のクロス装釘で、定価各巻二円とは、割引があるにしても、頗る高価であった。つづいて明治十六年にも、「やまと文範」は二冊出版されているが、それぞれ伽羅先代萩、壇浦兜軍記の一篇を収めた薄いものとなっている。

これと並行して、明治十四年には「近松著作全書」第一巻が発行された。百日會我、恋八卦柱曆、傾城反魂香の三種を収めている。十五年には第二巻が出た。内容は本朝三国誌、重井筒、姫山姥の三種である。この第二巻は、

後に明治二十二年になって、分冊三冊として販売された。定価は一冊ただの七銭であった。

これが明治時代における近松物の翻譯の濫觴であって、当時一般の需要がこれに伴わなかったために、その刊行は遺憾ながら二集に止まって、全集の完成を見るに至らなかったが、近世文学の研究史には、逸することのできないものである。しかもそれが当時洋書の輸入や、医学・物理学・化学などの自然科学の翻譯書の出版に、その力を注いでいた丸善の出版だけに、最も異彩を放っている。これには勿論特殊な事情がある。それは早矢仕民治が、この仕事に異常な熱意を持っていたためである。

二 早矢仕民治と武蔵屋本の発行

早矢仕民治は、早矢仕才兵衛の養子勝四郎（実父は大桑村の神主加藤正太夫）の次男であって、有的に取っては、義理の従弟に当る。しかし有的の祖母（山田玄順の妻）ヒサヨは、正太夫の妹であるから、有的と民治とは、血縁の再従弟またいとこの関係になる。実際にはむしろ叔父と甥に近かった。

有的が横浜で丸善を開業し、その経営がようやく発展して来たので、民治も横浜に出て、その仕事を手伝うこととなった。明治五年民治の十五歳の時である。明治十二年には東京の丸善に勤務するようになったが、税関関係の事務を担当したために、たびたび横浜との間を往来した。十三年には洋書目録の編纂に従事した。またこの年丸善を中心として、松井忠兵衛、清水卯三郎、西宮松之助、伊藤徳太郎、塩島一介等の人々によって、洋書翻譯組合六合館が設立されたが、民治はこの組合の主任のような地位を占めた。この組合で最初に出版したのは、ウェブスタ

一のスペリングブックで、大いに売れた。引き続いてウィルソン第二リーダー、ビネオ文典、ウィルソンのフライマー等を出版している。

この民治は非常に義太夫を好んだ。そのために近松作の戯曲集の刊行を志し、自分に最も関係の深い丸善から「やまと文範」を発行することとなったのである。

もっとも「やまと文範」や「近松著作全書」の出版は、早矢仕民治の二十四・五歳の時に当たっている。民治がどれほど義太夫に熱心であっても、当時としても数の少なかった底本の蒐集、判読、特に豊富な漢語や仏教語を駆使した近松の語彙の校訂などを、独力で行なうと考えることはむずかしい。「やまと文範」の奥付には、編輯出版人として、東京府士族、小野田孝吾の名を記している。武蔵屋本について精細な研究をした藤木秀吉氏も、この名について全く知らないと言っているが、或はこの人などが、民治の近松の翻刻について、隠れた協力者であったのではなからうか。

しかし最初の近松翻刻について、協力者があったか、なかったかということは別問題として、民治の近松熱は、これ以後ますます昂進して、その出版に全力を注ぐこととなった。明治十六年四月京橋南伝馬町一丁目、丸善の分店あるいは連鎖店として、叢書閣という書店が設けられた。その目的は日本橋の店を取り扱っていた書籍の委託販売を拡張することにあつたようであるが、事実はそれよりも洋書の中西屋と同じように、むしろ丸善で取り扱いくつかった邦文書籍の古本を売買することが主な仕事であつたようである。

叢書閣の最初の支配人は太田武之助であつたが、明治十八年に民治がこれに代り、翌年神田明神に近い宮本町に、

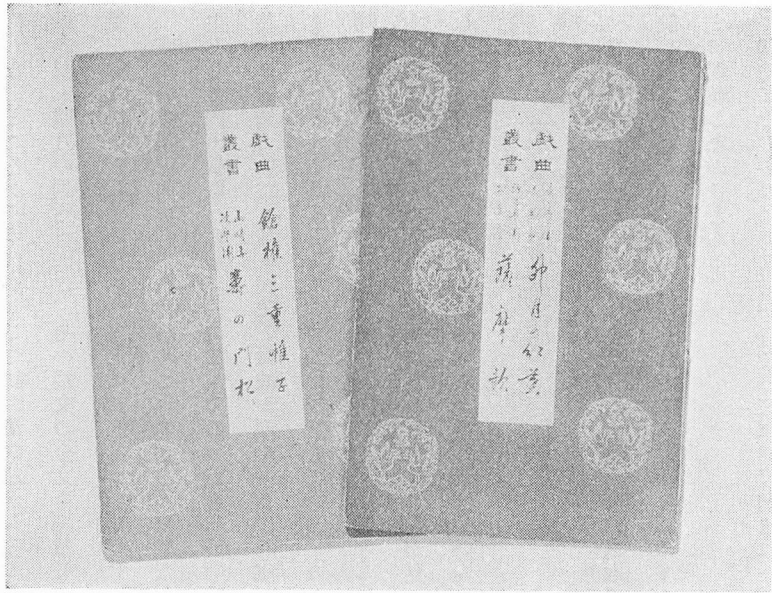
叢書閣を移した。これは明治十七年の丸家銀行の破綻に伴って、丸善がその支店や連鎖店を整理することとなった結果のようである。これ以来叢書閣は、丸善から分離して、民治の個人経営となったのである。

丸善から独立した民治は、叢書閣で古書肆の業務を行なう傍ら、熱心にその好む近松物の翻刻に従事した。一つにはさきに丸善で出版した近松著作全書が（恐らくはその売行があまりよくなかったために）中絶したのを、遺憾としたものであろうが、一つにはこの頃になって、日本の古典の価値が漸く再認識されて、復興の気運に向ったことにもよるのであろう。こうして刊行されたのが、いわゆる武蔵屋本である。武蔵屋とは、叢書閣の出版書肆としての別名である。その発行された目録は左の通りである。

天智天皇	明治二十二年	国性爺合戦	明治二十四年
十二段	"	双生隅田川	"
日本振袖始	"	心中宵庚申	"
出世景清	明治二十三年	心中天網島	"
関八州繫馬	"	源氏烏帽子折	"
吉野都女楠	"	曾根崎心中	"
蟬丸	"	心中二枚絵双紙	明治二十四年近松叢書第一冊
伊達染手綱	"	博多小女郎浪枕	"
最明寺殿百人上臈	明治二十三年	曾我会稽山	同第二冊
今宮心中	"	雪女五枚羽子板	同第三冊

堀川波の鼓	天 神 記	明治二十五年	同第十一冊
心中万年草	傾城酒香童子	"	同第十二冊
世継會我	信州川中島合戦	"	同第十三冊
夕霧阿波鳴渡	百合若大臣野守鏡	"	同第十四冊
冥途の飛脚	卯月の潤色	"	同第十四冊
鎗権三重帷子	遊君三世相	"	同第十六冊
山崎与次兵衛寿の門松	碁盤太平記	"	同第十六冊
心中刃は氷の朝日	一心五戒魂	明治二十六年	同第十七冊
五十年忌歌念仏	国性爺後日合戦	"	同第十八冊
生玉心中	善光寺御堂供養	明治二十七年	同第十九冊
女殺油地獄	唐船嘶今国性爺	明治二十八年	同第二十冊
卯月の紅葉	右大将鎌倉実記	"	同第二十冊
薩摩歌	津国女夫池	"	同第二十一冊
長町女腹切	天 鼓	"	同第二十一冊
淀鯉出世滝徳	傾城吉岡染	明治二十九年	同第二十二冊

以上三十二卷、五十六種である。その発行の最も盛んであったのは、明治二十四年及び二十五年である。いずれも四六判、四・五十頁の仮綴の小冊子である。その奥付に発兌元として、叢書閣と共に丸善書店の名のあることが注意される。なおこれを合本して「近松世話浄瑠璃」と題したものが二冊、「近松時代浄瑠璃」と題したものが四



武 蔵 屋 本

冊発行されている。

武蔵屋本を出版するについて、民治の努力は非常なものであった。底本とした近松の丸本そのものは、価格は何程のものでもなかったが、その種類によっては稀覯のものがあって、これを入手することは容易でなかった。「鎗権三重帷子・寿門松」の末尾には

左記の原本御所持の方有之候はゞ当時の市価を以て御譲受を願ひ度又御秘蔵のものなれば、相当の写字料を呈して拝借致度候に付左へ向御通知被下度候

として、

日蓮上人記、おかめ与兵衛卯月の色上、碁盤太平記跡追一段物、聖徳太子絵伝記、夕霧阿波鳴渡の五種を挙げている。この中で夕霧阿波の鳴渡は漸く一本を手に入れたが、前後二か所落丁のある本であった。しかし已むを得ないために、欠文のままこれを刊

行した。ところが一年ばかりして鶴沢清次郎から完本を手に入れたために、「夕霧」の再版を待たず、「百合若大臣野守鏡・卯月の潤色」には、その補文の全文を掲載している。完全な「夕霧」の刊行されたのは、明治二十六年の第三版である。民治の出版者としての良心が、いかに鋭敏であったかがわかる。

底本の蒐集と共に、その校訂もこれに劣らぬ困難な事業であった。武蔵屋本の刊行に当ってこれを援助したのは、主として内田魯庵、饗庭篁村あきばの二人であったらしい。特に魯庵は「近松世話浄瑠璃」の合本の序文の中で、近松の芸術を論じていて、最も民治と縁故が深かった。魯庵が直接の顧問格で、なお不審な点がある場合に篁村に問うたようなことであろうと藤木秀吉氏は推測している。なお早矢仕四郎の談話によると、この出版計画には幸堂得知が関係していたという。得知も篁村と同じく、いわゆる根岸派の文人の長老格であったから、当然のことであろう。また演劇通であった関根只誠翁にも教を乞うことが見えている。その他にもなお数多くあったことであろう。しかし全体の責任を負うた者が民治であったことは、いうまでもない。

三 武蔵屋本の摸倣

武蔵屋本と前後して、これを摸倣し追隨した翻刻本は、かなり出版されている。温故堂版、三々文房版、文学書院、薫志堂、鐘美堂版などがそれである。それらの多くは、武蔵屋本を底本とし、そのあるものに至っては、表紙まで剽竊したのさえある。

明治二十六年には博文館から帝国文庫が発刊された。その中には「近松時代浄瑠璃集」(明治二十九年)「近松世

話浄瑠璃集」(明治三十一年)「続近松浄瑠璃集」(明治三十二年)などが収められている。帝国文庫はい、うまでもなく博文館の名を高からしめた大規模な出版物であり、一冊に収められた内容も、比較にならぬほど豊富である。しかしその底本についても校訂についても、帝国文庫は武蔵屋本に依存したのであって、それは原本が武蔵屋本以外にないものが収録されていること、武蔵屋本で本文の誤まっている場所が、帝国文庫本でもこれを踏襲していることよってわかる。帝国文庫本は水谷不倒氏の校訂によるものである。民治はこれに憤慨して、博文館に対して版權侵害の訴訟を起すといきまいたのを、内田魯庵がなだめたという話もある。民治の努力は、一方では他の出版業者にも、多大の利益を与えたのである。

いずれにしても武蔵屋本の刊行は、明治時代の近松研究の大きい推進力となった。当時この方面に興味を持つ文人たちは、殆どすべて武蔵屋本によって、近松を読み且味わった。現在早稲田の演劇博物館には、坪内逍遙博士の遺品として、「近松浄瑠璃」と題された一巻がある。武蔵屋本の十九篇を合綴したものである。この本文の中には至るところに、博士自身の朱筆または鉛筆による書き入れがあり、またあるいは句点を打ちあるいは傍線を引き、あるいは仮名に漢字を宛て、あるいは適当でない宛字を修正してある。また短かい感想や批評を記入してある。博士がいかに武蔵屋本によって、近松の作品を味読研究されたかということを物語っている。この点からいって武蔵屋本は、実に近世の近松研究の貴重な記念物といふべきである。

なお民治は近松物の他に、わずかではあるが、他の作者の戯曲を出版している。

大塔宮 職鑑

竹田出雲

明治二十三年

心中ニツ腹帯 紀海音

明治二十四年

末広十二段 同

八百屋お七 紀海音

三世二河白道

不明

明治二十五年

井筒屋源六恋寒晒

西沢一風

明治二十七年

男色 加茂侍 錦文流

この中「八百屋お七」は戯曲叢書第十五冊であり、「井筒屋源六恋寒晒」は同第二十冊で重複している。

また武蔵屋の出版物には、わずかではあるが、西鶴物の複製もある。

好色 五人女 明治二十三年

好色 一代男 明治二十四年

これもまた近松物と同じく西鶴本が活字となった最初のものである。「好色五人女」には黒瘦子が解題を書いている。黒瘦子は内田魯庵の別号である。その凡例に

「原本卑猥の句多きを以て、モウレイがボツカシオを削除せしに倣ひて、是を代ふに〇〇を以てす」

とある。風紀上穏かでない文字を伏字にしたのは、これがはじめであるという。それはいずれにしても、当時青年文士の間に頃に昂まった西鶴の鑑賞と研究とが、この武蔵屋本によって多大の便宜を得たことは、想像に難くな

い。

しかし武蔵屋本の刊行は、その文学史的価値は大きかったが、経済的には必ずしも酬いらなかった。書物そのものの売行は決して悪くはなかったが、原本の搜索や校訂のための出費が多くて、その収支は償わなかった。何よりもこのような出版には大資本が必要であったが、民治はそれを欠いていた。そのために武蔵屋本の発行は、明治二十四年、二十五年を最盛期として、それ以後は次第に下り坂となった。一つには次第に近松の作品で流布の少ないものが多く刊行されるようになったために、それだけ一般の読者の需要が減少したこともあるであろう。二十五年以後になると、他の巻の不用になった表紙に、新しい題簽を貼りつけて使用しているのがある。二十八・九年頃になると、表紙の紙質そのものがひどく悪くなっている。いずれも経営上の困難を反映している。そして帝國文庫の刊行は、これに最後の大打撃を与えた。それ以後はすでに武蔵屋本の刊行の意義は乏しくなった。ここに武蔵屋本は、全くその座を譲るに至ったのである。(しかし武蔵屋本の残本が、後まで販売されていたことは、その広告が、「学の灯」四十二号(明治三十二年二月)に掲載されていることよってわかる)

武蔵屋本の終刊と共に、民治の事業は終わった。彼は間もなく神田の店を閉じて、東京書籍出版業者組合(後の東京書籍商組合)の書記となった。この組合は明治二十年に、小柳津要人らが発起人として創立されたものである。実をいうと民治が書籍商組合の仕事に関係したのは、その以前からであって、明治二十六年に、彼は組合の委嘱によって、組合員発行図書の見録の第一冊を作成している。その収録図書は九、八六七種に上り、この種のものとしてわが国最初であるばかりでなく、分類その他の点でも優れていて、民治の努力を見るべきものである。しかしこれ以後民治は妻を失い、子供たちはみな独立したために、組合の事務所に起臥するわびしい生活を送った。そし

て大正十一年、六十五歳で彼はその生を終えた。その遺族のあるもの（勝四郎）は、今も東京都品川区で書籍商を営んでいる。